りたてて読者に供される "sweet moral blossom" と物語の実質を構成する "human frailty and sorrow" との間に，かきむしるような不協和があることに注目し，作品の奥底に深くひめられた incest, patricide, masochism といったテーマに対して，ひかれる気持とおそれる気持の間のテンションが，いわゆる Hawthorne の "ambiguity" となってあらわれていると論じる。従って，Crews によれば，"ambiguity" とは作者の心理における ambivalence に外ならない。Crews のこの ambiguity=ambivalence の図式でもって，Hawthorne の "ambiguity" のすべてが説明しつくされるとは思わないけれども，"Rappaccini's Daughter" や "Young Goodman Brown" あるいは "Roger Malvin's Burial" などの作品について，この図式によって興味深い解釈が成立することは認められよう。ここに一つ一つ紹介する余裕はないけれども，Crews はこれらの短篇のみならず他の多くの作品について面白い解釈を試みている。

すでに上に触れたように，Hawthorne の作品全体にわたって精神分析的アプローチを試み，作者の無意識の世界に光をあててみることは，Hawthorne の理解にとって大いに参考になる。だが，作品の精神分析的解釈から作者の無意識の世界に入りこんでゆく以上，仮空の作品に基ずく推論のもろさをどう処理するかという困難さを克服しなければならない。たとえば，「昇華」作用の結果創り出された作品があるにしても，すべての作品がそうであるとは言い切れまい。従って作品と作家を「昇華」作用で結びつけることは，かなりの傍証が必要ではなかろうか。Crews は精神分析の方法によって作品解釈を押し進めることを，くどいほど弁護しているが，この自己弁護は必ずしも作品と作家をつなぐ推論のもろさ——フロイドの芸術論そのものにも認められる傍証のないもろさにも通じる——を支えることにはなっていない。

また，作品の精神分析的解釈から作者の無意識の世界の解明へ進む際に，なぜ Crews は短篇作品の創作年にもとづく序列に厳密な考慮をはらわなかったのであろうか。その為たとえば結婚直後に書かれた一連の作品に共通する特色が見失われている。また，Notebooks の記述と実際の作品との関係になぜもっと綿密な注意をはらわなかったのであろうか。さらに，手紙類の決定版の刊行が待たれているとはいうものの，なぜ手紙類を資料として多く用いることをさけたのであろうか。

このような疑問があるにしても，彼の試論は provocative である。読者は Crews が屢々展開する自己弁護のくどくどしさに悩まされながらも，彼の描いた Hawthorne 像にいどみたくなる衝動を強いられる。その意味で，今後この種の精神分析的な観点からの総合的作品解釈や Hawthorne 解釈が，Crews への反論・異説として現われてくることを大いに期待したい。Crews の書物は充分その刺戟となる意義をもっているといえよう。（同志社大学文学部助教授）

Mark Twain: The Fate of Humor.

By James M. Cox. Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1966.

那　須　頼　雅

Mark Twain の人間形成における重要な要素として忘れてならないのは，彼が Gilded Age の子であり，"gilded life" を軽蔑しながらも，その圏内から抜けきれなかったという点である。彼が一方では喧しく道徳的せんさくを押し進めながら，他方では金銭欲のとりこになった宿命を，我々は見落したり，漠然とうけとったりしてはなるまい。もちろん，Bigelow Paine の権威ある伝記を始めとして，Van Wyck Brooks の *The Ordeal of Mark Twain*, あるいは，Bernard Devoto の名著 *Mark Twain's America* など，この事実を我々に注目させる書物には事欠かぬとも言えるであろう。しかし，最近数年間に出された Mark Twain 研究書には，「新批評的」な分析批評が余りに広く根をおろし，いたずらに奇をねらう Mark Twain 批評が目立つように思われてならない。

この意味で，James M. Cox 教授の新著 *Mark Twain: The Fate of Humor* はまさに我々の待望の書と言うべきであろう。教授に依れば，Nevada での

Clemens は，ただひたすらに "quest for gold" に狂奔する若者でしかなかった。この quest の失敗が飽くまで discovery of "Mark Twain" の元である。この教授の立場から，Mark Twain の dual personality，つまり speculator であって artist, innocence を装って experience の人間といった二重性と，これから派生的に起る "mistaken identity" や conversion を Mark Twain の humor であるという観点とを大きな二本の柱に仕立てて，この書は組み立てられている。

discovery of "Mark Twain" が，この書の第一章のテーマとなっているが，この discovery の発想は，そのまま，Cox 教授のものではない。これより少し前に Justin Kaplan が，*Mr. Clemens and Mark Twain* の中で，"Clemens' discovery of the usable past" の事実を重視して，Clemens の31才以前を切り棄て，それ以降だけに限って Mark Twain 論を展開したからである。しかしながら，Cox 教授のオリヂナルな点は，"Mark Twain" という Clemens のペンネームの起源にまつわる伝説を却け，"Mark Twain" の真の意義をその主要な文学作品の創作技巧の面に求めていることだ。教授は先ず一般に用いられるペンネームを三つに類別し，本名を完全に隠そうという明らかな意図をもつ，たとえば Henry Adams の Francis Snow Compton がその例であるようなもの，そして次には Mary Ann Evan の George Eliot のたぐいにみられる，その意図がさほど鮮明でないもの，最後には，Dickens の Boz のような，ただ骨稽味をそえたり表示を目的としたりする際に用いられる "comic pseudonym" があると言う。Clemens の "Mark Twain" は，もちろん，この最後の部類にはいるが，単なる一般的な "comic pseudonym" にとどまらず，それ以上のものを意味していることを教授は強調する。すなわち，"Mark Twain" というペンネームは，文学上の独得な action, language, attitude を表わし，Mark Twain の作品のあらゆる局面と密接不離の繋がりがあると言うのである。Dickens の場合，彼の作品に一貫して Boz なるペンネームを使用することを避け，*David Copperfield* は Boz の署名を付さないで書かれた。これにひきかえ，Clemens は，"Mark Twain" の発見を契機として，ほとんど主要な作品全部に "Mark Twain" を付している事実から判断して，Cox 教授は，この pseudonym が Dickens の Boz と異なり，Clemens の identity を歪めたり抑圧したりするものではなく，反って逆に，それを解放し刺戟づけ発展させる機能を果したと述べる。

この場合，我々が特に注意しなければならないことは，この "Mark Twain" の発見が，元の Clemens から，なにか別の新しい Mark Twain へと転換させたと，教授は考えていないことだ。この発見とは，Clemens なる自己の拡大伸張，いわば "extention" であり，"addition" であるという考え方である。

この Cox 教授の説は，我々に豊かな示唆を与える新しい理論であると言うべきであろう。Mark Twain を研究する我々の前にたちはだかる障壁は，感性の鋭い投機的な野心家 Clemens という肉体に，控え目な fool を気どった一つの口 Mark Twain が付着した全体から出てくる声の分析の問題である。"The Jumping Frog" という一作を取りだしてみても，narrator の大枠の内に story-teller の小枠がはまり，その内に story が蔵められているという form の外に，その story を厭々辛棒しながら聞いている "I"，Clemens がいるという風に見えて，読者を混乱させてしまう。これは，Clemens が故意に仕掛けたわなのか，それとも彼自身の方で混乱してしまった結果なのか，批評上，重要な難問として我々の間に残る。この面から，Cox 教授の理論は，たしかに一応の解釈を与えてくれるという点で見落せない業績である。

従来 Mark Twain を humorist と認める批評家は数多かったが，彼の humor そのものに取り組み，主要作品全部を通して実証的に論じた業績は驚くほど少い。私の知る限りでは1962年に出た P. Covici の *Mark Twain's Humor* を数えるにすぎない。Cox は特に *Huckleberry Finn* 批評を二つのタイプに分けて次のように述べている。

In the face of its almost universal acceptance, a defense of *Huckleberry Finn* can be little more than a sentimental posture. The attitude of acceptance fall essentially into two categories: those which try to discover meaning in the book and those which insist that it is a humorous book. Critics who pursue the meaning, the myth, the sociology, or even the structure of the book, usually fail to explore its humor. Their typical reaction is likely to be, "Of course the book is humorous, but behind the humor there is a serious world", and they proceed to search for this seri-

ousness. Critics who insist upon the humor fare even worse, for they seem never say anything about the humor. Instead, they strike negative postures, resisting meaning by proclaiming that the book is simply and marvelously a humorous narrative of a boy's adventure. The humor to which they proudly point is left untouched, presumably on the grounds that it is too delicate to touch. (p. 157)

かくも痛烈に批判する著者の拠り所は，Freud の理論である。Freudian 式批評におちいることは極力避けてはいるものの，Freud が "the economy of expenditure of affection" の最良の見本として Mark Twain の humor をとりあげていることに力を得て完成されたのが，Cox 教授のこの労作であるという。その意味でまことに大胆な試みであり，実に野心的なアプローチであると言わねばなるまい。

特に我々が興味深いと感じるのは，教授の humor の考え方である。

Mark Twain's "humor" was itself the conversion of real tyranny and slavery into play and adventure.

この視点からすれば，従来とかく論争になった問題が，以前と変った色合いを帯びてくる。たとえば，*Huckleberry Finn* の ending の問題である。この失敗か否かの問題はさておき，この ending の解釈が大きく異ってくる。"Mr. Eliot, Mr. Trilling, and *Huckleberry Finn*" という示唆に豊む論文の中で Leo Marx は，ミシシッピ河の旅を Huck と Jim との quest for freedom と断定したために，この ending での Tom Sawyer 的世界への復帰は defeat であると論じたが，Huck の Huck たる所以のものは，quest といった serious な問題から逃避するところにある。Cox 教授は，これに関して次のように述べている。

A quest is a positive journey, implying an effort, a struggle to reach a goal. But Huck is escaping. His journey is primarily a negation, a flight from tyranny, not flight toward freedom.

しばしば引用される Huck の決断の言葉，"All right, then, I'll go to hell." は，種々多様な意図をもって多くの批評家の間で重用されたが，Cox 教授は，この言葉を Huck の identity を最も強く脅かすものとして理解する。「地獄へ赴こう」とまで Huck を思い込ませる情況は，play, pleasure のみを追求する Huck には，およそそぐわないものなのだ。Jim を逃亡させようとする心境は convention や moral の世界に住む Tom のものであって，Huck のとは真反対のものである。この立場からすれば，Huck の決断は，正邪を云々する social principles の前に Huck が屈したことになるし，又最後の，burlesque の世界への Huck の復帰は彼の rebellion を実現させる手段であることが判る。こうして導かれる教授の結論は，*Huckleberry Finn* は，姉妹篇 *Tom Sawyer* と較べて，以上に，serious novel とは言えない。それは，むしろ，それ以上に humorous book であることになってくる。ここでの，彼の humor は，slavery という社会悲劇を "boy's odyssey of adventure" の形へとすり変え，その過程において，人間を縛りつけ抑圧する真の tyrant は "conscience" であることをあばいているという推論に到達する。

ここで，Cox 教授の理論や解釈をひとつひとつ紹介するいとまはないが，総括して言えることは，この書に盛られるものが一見従来の批評に背を向けたかに見えるものの，実際は，Brooks や Devoto の理論の再認識と，それに基づく発展という一面を読者に強く感じさせる。Brooks が先鞭をとった Mark Twain の二面性は，この著書を貫ぬく大きな軸となっているし，Devoto が初めて明快に解説した Mark Twain の humor がこの著書の主要テーマになっていることなどからも明らかである。ただこう書いているうちでも気にかかる点が全く無いというのではない。humor を専ら教授は，その possibilities とか conversion とかであるとして論じている。つまり，humor の機能に徹頭徹尾ライトを当てている。多くを希み過ぎるのかも知れないが，いわゆる「ユーモア」といわれるものの本質にまで触れて欲しかったと思われてならない。教授の "humor" にしか過ぎないではないか，laughterとの関係はどうなのか，wit とはどう区別しているのか，といった不満が残るのは私だけであろうか。Freud が wit や the comic に当てたほどに humor にスペースを割いていないことを遺憾としている Cox 教授自身が，humor の意味規定をはっきりと示していないのは全く奇妙なことである。Mark Twainが，"How to tell a story" とか *Mysterious Stranger* の中で用いる humor の意味が全く怪しげなものであるだけに，尚一層，このことに気を配って欲しかった。（同志社大学商学部助教授）